

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 受 | 2 | コ | シ | こ |
| 賞 | 0 | ン | ョ | と |
| 作 |   | ク | ー | ば |
| 品 | 2 | ー | ト | ら |
| 集 | 2 | ル | シ | ん |
|   |   |   | ョ | ど |
|   |   |   | ー |   |
|   |   |   | ト |   |

# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| ごあいさつ        | 4  |
| 審査員長総評       | 6  |
| 受賞作品         | 9  |
| カメムシそう理大臣    | 10 |
| 伊賀陽一         | 10 |
| 抜け殻          | 12 |
| 前島恵          | 12 |
| 僕らとリスの五日間小戦争 | 15 |
| 高山想真         | 15 |
| 夏女           | 18 |
| 福岡楓夕         | 18 |
| 氷細工          | 20 |
| 原彩七          | 20 |
| ある町田の普通      | 23 |
| 小田東依         | 23 |
| そらのひみつ       | 26 |
| 小林花穂         | 26 |
| お天気選挙        | 28 |
| 中村汎森         | 28 |

ただの散歩じゃないさんぽ  
空を見あげて  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
大塩 陽菜  
工藤 美結

34 30

受賞作品一覧 39

審査員講評 43

審査員プロフィール 51

実施概要 53

町田市長 石阪丈一

「ことばらんどショートショートコンクール」は、町田市が新設した小学生・中学生・高校生を対象とした文学賞です。二〇二一年に開催された第一回目は九三九編の作品を、第二回目となる今年は八八七編の作品をご応募いただきました。町田市の多くの子どもたちが熱心に文芸創作活動に取り組んでいることが伝わって来て、心から嬉しく思います。

原稿用紙1枚から作品となる「アイデアと、それを活かした印象的な結末のある物語」である「ショートショート」が、子どもたちの文学と触れあうきっかけとなり、一人でも多くの子どもたちが文学に親しんでもらえるようになってほしいと思います。そして、このコンクールを通して、自ら創造力を発揮し、オリジナリティあふれる作品が生まれ、ゆくゆくは町田市から作家が育っていくことになれば、これほど素晴らしいことはありません。

このたび、受賞者一〇名が決定しました。どの作品も力作ばかりです。残念ながら選外となった作品の中にも、受賞作品に劣らず独創的なアイデアあふれるユニー

クな作品が多く見受けられました。自由に発想を広げ自在に世界を創造できるショートショートは、「書く人」にも「読む人」にも様々な楽しみを与えてくれます。青少年の皆さんには、想像の世界で豊かな心を育んでいただきたいと願っています。

## 審査員長総評

田丸 雅智

今回も八八七作ものたくさんのご応募を本当にありがとうございました。審査ではみなさんの豊かな想像の世界に触れ、とても刺激的な時間を過ごさせていただきました。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

ショートショートの醍醐味のひとつは、読んだり書いたりするうちに日常の見え方がどんどん変わるといことです。ありふれたものだと思っていたものがまったく別のものに見えてきて、胸が高鳴り、世界が輝きはじめます。みなさんにもその感覚が伝わっていればうれしいなと思うと同時に、そうして新しいお話の種を見つけたら、ぜひまたどんどん作品に仕上げてほしいなと思います。

ショートショートの創作は楽しいだけではなく、文章力や発想力、論理的思考力など、生きていく上でとても役立つ力の育成にもつながります。このコンクールをきっかけに、引き続きショートショート創作に励んでいただければうれしいです。







受  
賞  
作  
品

陽太とお父さんはさん歩いていました。

今日はせんきよのとうひよう日。けいじ板には、立こうほした人たちのポスターがはってあります。

お父さん「今日はせんきよのとうひようがあるんだ。」

陽太「せんきよってなに？」

お父さん「国みんを代表して国のことを考えてくれる人をえらぶんだ。」

陽太「へえ。」

虫ずきの陽太はけいじ板にカメムシがくっついていてのを見つけました。

陽太「あ、カメムシがいる。」

通りがかりのおじさんは「へえ、カメムシか。」と言いました。そのうしろのおばさんも「ほんどだ、カメムシね。」と言いました。

陽太「カメムシも立こうほしているみたいだね。」

お父さん「カメムシも当せんするかもね。」

通りがかりの人たちも「カメムシだ。」と口をそろえて言いました。

その日の夜のニュースは大変なことになっていました。なんと、カメムシが当せんしたのでした。

さいしよの国会です。カメムシがきんちようしながらたて物に入ると、とく別な小さいバッジをつけてもらいました。国会が始まりました。ぎいんさんたちが大声でぎろんしています。カメムシはその声におどろいてしまい、「プーン。」とくさいオナラをしてしまいました。

ぎいんさんたちは「くさいぞ、くさいぞ！」「なんだこのにおいは！」「カメムシか？」「カメムシだ、ぜったいそうだ!!」とさけびながら部屋を出ていってしまいました。

そのとき多数決がとられました。ぎいんさんたちがみんな「カメムシだ！」ときけんだので、その声でひようがとられてしまいました。

けっかが出ました。「カメムシ君、四百ぴょう。」「ないかくそう理大臣は、カメムシ君に決まりました。」

カメムシそう理大臣がたん生しました。

## 抜け殻

前島 恵

落ちてゐる抜け殻をひとつひとつ拾ってゴミ袋に入れていく。時折、無理やり袋に詰め込んだせいでぐしゃりと潰れる音がする。

街には今日もたくさんさんの抜け殻が落ちてゐる。町田駅前をくるくる回るオブジェの周りなんかは、特に昼間人が行き交うせいで抜け殻の数が多い。だからいつもこの辺りを中心に抜け殻を集めるのだが、今日はいつもとよりやけに人が少ない。普段はよくいる路上ライブ中の若者もいなくて静かだ。

失恋したり試験に落ちたりして氣力がなくなり、抜け殻状態になった人は、脱皮して本当に抜け殻を残していく。夜、その抜け殻を拾うのが私の仕事だ。拾った抜け殻はまとめてゴミ処理場に持っていくことになっている。

私の手で潰してしまいたい、と思った。いつもならゴミ処理場に持って行って大きな機械で潰されるこれらを、今日は自分の手で粉々にしてしまいたくなった。いつもより人が少なくて静かだからだろうか。じめじめとした、センチメンタルな気分だった。

私は抜け殻が嫌いなのだ。抜け殻を生み出してしまうほど何かに夢中になったことも誰かを好きになったことも無い私は、脱皮した人たちが羨ましくて仕方なかった。この仕事を続けるうちに、羨望は嫌悪に変わった。いつかこの恨めしい抜け殻を自分の手で潰したいと思っていた。今まで抜け殻を拾いながら常に頭の片隅にあった願望をこれから叶えられると思うと胸が高鳴った。抜け殻をパンパンに詰め込んだ大きな袋を車の後部座席に乗せて家へと向かう。仕事を放棄して抜け殻を持ち帰る罪悪感すら今は心地良い。早く、早く家に着きたい。私の生き方を否定するようなこの抜け殻を、早く潰したい。

家について、リビングに抜け殻を広げる。腰に手を当てそれらを見渡してからそろそろと抜け殻に手を伸ばしつつ座り込む。適当に手に取ったひとつを握りしめてみる。すると呆気なくパリパリと音を立てながら手から欠片がこぼれおちていく。この上ない快感だった。ほかのものも夢中になって潰していく。両手でちぎってみたり握りこぶしで叩いてみたりする。潰していくうちに、夜の街で抜け殻を拾うあの嫌悪感が無かったことになっていくように徐々に体から力が抜けるのを感じた。全てを潰し終えたとき、私の体にはもうほとんど気力が残っていなかった。手に張り付いた抜け殻の欠片をぼーっと見つめ、なげなしの力で抜け殻のついた手を舐

める。そこからはずさっきまで無くなりかけていた氣力が戻ったようだった。無心で潰された抜け殻を口に運んだ。口の周りに着くのも構わず食べ続けた。味はなかった。ただ、憎いこの抜け殻を自分の手で完全に無くしてしまうために食べ続けた。食べ終わったとき、今度こそ私の体からは魂が抜けたように完全に氣力が無くなっていた。燃え尽きて体を動かすことが出来なかった。

日本中にニュースが流れた。あるマンシヨンの一室で抜け殻になった女が見つかったのだ。脱皮して残った抜け殻ではない。からだ本体が抜け殻になっていたのだ。そして、解剖された女の体からは大量の人の抜け殻が見つかった。

## 僕らとリスの五日間小戦争

高山 想真

月曜日の朝、六年生全員が体育館に集う。一番前に居るのはやはり校長先生。ではなくリスのような生物。僕らはその生物をにらみつける。この生物はリス園から脱走したリスが、ある博士がつくった謎の液体を飲んでしまい変化した生物だ。体は大きく目は赤い。何でも食べてしまうからハングリースクワレルと言われている。駆除をしようとしているのだがオスやメスと関係がないためすぐに増えてしまふのだ。そんなハングリースクワレルがあるとある鶴藤第一小学校に入ってきた。

六年生と教員が駆除をすることになったが中々難しい。いつもいつも逃げられてしまう。そんな時、僕はあるうわさを耳にした。薬師池公園に龍がいるといううわさだ。僕はその龍ならハングリースクワレルをどうにかしてくれると思い、いつもの仲良しグループの正氏と遥彦、恵と一緒に薬師池公園に行った。龍が出てくる呪文を唱えた。四人で「アンバイラー、イークババー」と。そうすると池から何か出て来た。龍だ。龍は恵の足をつかみあげ人質にした。龍は「なんだ」と強い口調で言ってきた。事情を説明した。そうすると協力をしてくれることになった。そし

て色々なことを教えてくれた。例えば「ハングリースクワールは人に化けられる」  
こととか。

水曜日の朝、僕らは薬師池公園に集まった。いつもの仲良しメンバーと龍がいる。僕らは銃を片手に持つ。そう、今から反撃開始だ。龍とは一旦離れ仲良しグループでハングリールクワールを探す。探し始めてから五分くらいしたら鶴藤第三小学校の前にハングリースクワールがいた。僕は汗を垂らしゴクリと唾を飲む。緊張している僕に気付いた正氏が僕の肩を優しく叩き「大丈夫」と言った。ハングリースクワールが腹をならした。ハングリースクワールは空腹になるととても危険だ。遥彦が飛び出した。ハングリースクワールは大口を開けた。遥彦の弾丸はハングリースクワールを掠る。弾丸には薬が塗ってある。五秒間の沈黙。その後ハングリースクワールが可愛らしいリスになる。戻ったのだ。僕らはこの調子で何百体もリスに戻した。

しかし次の朝、僕らはとんでもない光景を目にした。十五メートルもある巨大なハングリースクワールがいた。僕らは龍の所に逃げようと思いき走った。ずっと走った。しかし薬師池の目の前で正氏がかかった。逃げるか助けるか迷っていると池が光った。何か出て来た。龍だ。龍はハングリースクワールを包み込み何匹も



のリスに変えた。その次の日、本当の平和がおとずれた。しかし不思議な光景を見た。学校の授業中、恵の尻の方からリスの尾のようなものが見えた。そういえば恵の目は赤みがかっている。あれは僕の見間違いだっただのか今でもよくわからない。

## 夏女

福岡 楓夕

世は夏が終わるといふのにコップだって汗をかいている。午前九時三十二分。二分遅れた。そう思いながら玄關のドアノブに手をのばす。ドアを開けると、灼熱の太陽と響きわたるせみの声と一人の女がいった。

「おはよう。朝ごはん食べた？」

夏の風で揺れた髪とともに、彼女が言う。俺は首を横にふった。それを見た女は部屋に入り台所へ行つた。慣れた手付きで冷蔵庫を開け卵を割る。彼女は「夏女」だ。よく聞く、雨男、雨女のように、彼女と一緒にいれば三百六十五日、夏になる。

俺は、元々夏が好きだった。子供の頃から夏といえば夏休みであり、この夏休みが一生続いてほしいと宿題に追われた子供時代誰もが思ったことがあるだろう。俺は毎日が幸せだったが、彼女はどうか。生まれてからずっと、夏の彼女に聞いてみた。台所に立つ彼女の手が止まる。

数秒たった後、ふり向いて言った。

「うん。幸せかな……」

優しく笑った。その笑顔は儚かった。まるで夏の終わりの切なさのようだ。幸せにしたい。そう思い俺は、彼女が帰った後考えた。違う季節を堪能して欲しい。他に彼女と同じ経験している人はいるのだろうか。調べると、人生を秋と過ごす「秋女」を見つけた。とある日、家に招待した。俺の目を見て微笑む彼女に何だか温度の低さを不快に感じる。午前九時三十分に玄関を開ける。しかし彼女の姿は見当らない。いつもの灼熱の太陽とせみの声もない。あるのは、秋の色に染まった俺の街だけだ。その日から夏は俺の人生から消えた。どうやら一度に二つの季節は訪れないらしい。

「今日からは秋ですね」

秋女がつぶやいた。

キヤツキヤツという子どもの笑い声が、公園に広がる。そのすぐそばでは、『氷細工』と書かれた看板の店の中から、人の良さそうな若者が、子どもたちを見守っていた。すると不意に店の扉が開き、男が入ってきた。男はグルリと店内を見回したあと、若者に気づき、

「氷細工ってなんだい？」

と尋ねた。若者は、

「氷細工とは、飴細工を氷にしたものです。少し砂糖をまぶして、甘く味付けをしてあります。」

と説明した。男は、氷細工が何か分かったらしく、メニュー表を開いた。メニューには、スーパーマン、プリンセス、アニメのキャラクター、鳥、猫、犬など、他にも数十種類ある。どれにしようかと男が迷っていると、若者が

「この店の氷細工の面白いところをお話ししましょうか？」  
と、声をかけた。

「じゃ、頼むよ。」と男が返事すると、若者はさっそく話し始めた。

「この店の氷細工は、自分が食べたものと同じものになれるんです。つまり、スーパーマンの氷細工を食べれば、スーパーマンになれる、ということですよ。もとに戻りたければ、『元に戻れ』と呟けばいいんです。」

若者のこの説明に、男は

「本当かい？」

と、疑った。すると、若者は、

「嘘だと思うなら、これを舐めてあの公園にいる子どもたちを見てください。」

と言い、男に丸い氷細工を渡した。

「形はマルなので変身は出来ませんが、変身している人を見分けることができますよ。」

男は、その氷細工を口に入れ、子どもを見た。そして、目を見開いた。子どもではなく、アニメのキャラクターが遊んでいる。

「見えましたか？」

と聞く若者の言葉に大きく首を縦に振り

「本当なんだな。」

と言った。男はまだ興奮している様子で、

「それじゃ俺は、空を飛んでみたいから、鳥の氷細工を買おうよ。」  
と、頼んだ。若者は、

「ありがとうございます。では、最後に一つ説明させてください。」  
と言った。

「この氷細工には、危険なところがあります。それは、氷細工が溶け終るまでに元に戻らないと、変身したままになってしまう。という点です。だから、氷細工が溶け終わるまでに、絶対元に戻ってください。」

「わかった。約束する。」

そう言う男に、若者は微笑んだ。そして、もう一度口を開き、

「実は私も戻れないんですよ。」

と言いながら、上着をぬいだ。

「数年前に『天使』の氷細工を食べたつきり、このままなんです。」

いたずらげ

悪戯気に笑う若者の背中には、真っ白な羽がついていた。

ある町田の普通

小田 東依

町田市、それはある不思議な巨人が住んでいる市。

「ねえ、こんな時間だけど遊んじゃって大丈夫かな」と心配性な巨人の子は言う。  
「大丈夫、大丈夫。おもいっきり遊んじゃおうよ。」と続いて陽気な怪物の子が言う。

巨人や怪物といっても今は、人間のサイズだけど。

よしこれから遊ぼうという時、空に赤い球体と青い球体が激しくぶつかり合う姿が見えた。

「お父さんだ！」

二人の声がそろった。そして、赤い球体は巨人の子のそばに下りた。青い球体は怪物の子のそばに下りた。赤い球体の中からは巨人の父が、青い球体の中からは、怪物の父が出てきた。そして、巨人のお父さんが言った。

「ここで何をしているんだい？」

「友達と遊ぶところだよ」

「友達？だれが？」

「あの子だよ」

巨人の子が指した先に怪獣の子が父の目に入った。

「まさか、あの子が友達！」

「そうだよ」

「えっと、友達を作るのはいいことだが、さすがに怪獣の友達はちよつと」

「どうして？」

そのころ、怪獣の父子も同じ内容を話していた。

「いいか、お前にはあの子が遊ぶ相手だと思ってるかもしれないが、あの子は普通闘う相手なんだ。」

「でも、そうしたら、この町田市に被害がおよんじやうかもしれないからいやだよ」

「あの子もきつと遊び相手が怪獣だと思ってるかもしれないが、普通はお前とあの子は敵同士なんだ。闘う相手なんだ。」

「でも、僕は町田市やあの子のことを傷つけたくないんだよ。」

そして、いつのまにか巨人の父子がそばまで来ていた。二人は肩組みをしながらお父さん達に言った。

「お父さん達の普通は闘うことかもしれないけど、ぼく達の普通は町田市で闘うこ



とじゃなくて、二人で仲良く遊ぶのが普通なんだよ、普通闘う相手でも仲良くするのは出来るんだよ。」

二人のお父さん達は、恥ずかしそうに言った。

「そうか。それがお前達の普通なんだな。口をはさんで悪かった。これからは、学校が終わったら好きなだけ遊んでいいぞ。」

二人の子はそれを聞いて喜んだ。

「やったー。これからもいっしょに遊んでいいんだ！」

「おっと、もうこんな時間だ！早く帰りなさい。」

二人はそれぞれの家に帰っていった。

「ばいばい、また明日遊ぼうね」

という言葉をさけびながら。

さてと、父親同士はというと、

「さて、改めて始めようか。」

と言いながら、巨人の父は赤い球体に、怪獣の父は青い球に戻り、空にまい上がっていった。こうして、父の二人は「闘い」つまり二人の普通の時間を町田市の上空で始めたのだった。

そらのひみつ

小林 花穂

これは、ぼくがじっさいにたいけんしたはなし。

ぼくは、そらを見ておもった。なぜそらは、あるんだろう？ なぜそらは、くらくらしたりあかるくなったりするんだろうか？

そしてぼくはおもった。

そうだ！ そらは、いきてるんだ。

あさは、おきてるんだ。そしてくらいひは、ねむっているんだ。

そして、またそらを見あげてみると、そらがよごれているのにきづいた。

「おーい！！ そらさん、よごれているよー。」

とはなしかけた。

すると、

「ほんとうだ。さつきえんとつのおえにいたからだ。」

とそらがこたえた。

ぼくは、みんなをよんだ。

そして、しゃぼんだまをそらへたくさんみんなでとばした。  
しゃぼんだまですらをおせんたくした。

あわあわあわあわ

ぶくぶくぶくぶく

しゃぼんだまのあわでそらがきれいになった。

そらが

「ありがとう」といった。

ぼくたちは、てをふって

「よかったね」といった。

## お天気選挙

中村 汎森

時は二一〇〇年、今この世界に天気予報はない。とある天才科学者ボブが便利な世の中にするべく、作り出した「お天気選挙」により各国の天候が決まることになったからだ。「お天気選挙」とは前日の夜二十三時五十九分までに次の日の天気を投票して、その国民の投票数で決まるシステムとなっている。

これにより日本では暑い夏に雨や雪が降ることがしょっちゅうである。また、運動会や遠足シーズンには雨が降らなくなり、天候による予定の遅延がなくなっており、うまく便利に活用できているのだ。

しかし、今、海外ではこの「お天気選挙」をめぐり、紛争が起きているのだ。それは地球上で降る雨の量は変えられないことが原因だ。人口が多い地域が都合よく雨を降らせることで、人口が少ない国は雨が極端に降らなくなってしまうたり、その逆も起こっている。

中国では西北部側の砂漠化がかなり深刻となっていたことから、ここ数年は雨を多く降らせている。しかし隣国の河川流域は必要のない雨に長年巻き込まれ、洪水

が頻発しているのだ。隣国の住民は怒りを顕にしている。また豊かな国が貧しい国から投票権を購入していることも問題になっている

科学がどんなに進んでも、「共に生きる」という意識がないと解決できない問題は新たに発生してしまう。いつになったら世界は快晴になるのだろうか。

全世界が明るく晴れるまでボブの研究は続くのであった。

## ただの散歩じゃないさんぽ

大塩 陽菜

さんぽに出かける。散歩と言ってもただの散歩ではない。未来からやってくる私をさがすさんぽだ。私には夢がある。それは、人類初のタイムマシーンを作って、世界にイノベーションをおこすこと。簡単なことではないけれど簡単なことじゃないから面白い。きっとできると私は思う。タイムマシーンが完成したら、未来の私はきっと過去の私、つまり、今の私に会いに来るだろう。もしかしたらもうすでに来ていて、どこかで私のことを見ているかもしれない。久しぶりの過去の世界に嬉しくて町をぶらぶら歩いているかもしれない。未来の私は今、どこにいるのだろう。

休みの朝、お母さんはスペシャルな朝食を作ってくれる。サクサクして中がふわっとしたフレンチトースト、玉子やベーコン、チーズがはいったBLTサンド。

私は、美味しい朝が来るのが楽しみで、早起きをする。朝ご飯を食べた後、ただの散歩じゃないさんぽに出かける。冷たい空気が気持ちいい季節。最初に向かうところは、芹が谷公園。朝早い時間に行くと、ロングすべり台が空いている。階段を登ってシューツと滑る。ほおにあたる風がひんやりして気持ちがいい。私は駆け足

で芹が谷公園へ向かった。未来の私もあのロングすべり台を滑っているかもしれない。芹が谷公園に着くと、まだ遊んでいる子供はいなかった。一人も並んでいない。ロングすべり台を、私は何度も滑った。階段を駆け足で登り、時々、滑り台の上から私を探した。どこにもいない。ラスト一回を滑って冒険遊び場へ移動する。こっちも一番のりだ。ターザンロープからネット。竹のブランコまでぜんぶが面白い。ここでは、焚火もできるからお芋をやいてもらった時は最高。このオプシオン付きでまた遊びに来よう。さんぼはまだ始まったばかり。芹が谷公園にはいなかった。私。次は文学館、ことばらんどへ行くことにした。

私が住む町田駅周辺には、文学館から図書館と本にふれられる場所がいくつもあ  
る。本好きな私には幸せなところ。未来の町田が、本のまち町田と呼ばれていたら  
私は嬉しい。

ことばらんどに着き、館内をざっとみたけれど私はいなかった。ここから中央図  
書館までは近い。ことばらんどで少し本を読んでから私は中央図書館へ向かった。  
中央図書館はとにかく広い。本の数もすごい。外国語で書かれた本、点字の本、本  
だけでなくDVDもある。ここにいたら一日なんてあっという間だ。私は借りたい  
本を選んでから館内をさんぼして中央図書館を出ることにした。ここにも私はいな

かった。図書館と言えば、家の近くにあるさるびあ図書館。その隣にデゴイチがある。小さい時、さるびあ図書館で本を読んだ後は、デゴイチで遊んだ。決めた。次に向かうのはさるびあ図書館。

この図書館の好きなところは、入口前の花壇が華やかなところ。花壇に咲く季節の花は、いつみても綺麗だ。町田の町なかを通過して、さるびあ図書館へ向かう。途中で、いくつかきんじよの本棚を見つけ、未来の私は、ここにも立ち寄ったかもしれないと思った。

目的地に着くと、花壇の葉牡丹がこんにちはと声をかけてくれた。未来の私は、この声に気付いたかな？葉牡丹に挨拶をした私は中に入り私を探した。ここにもいない。外に出てデゴイチのところへ行った。でも、誰もいなかった。私は家に帰ることにした。私はどこにいるんだろう。

私の家はマンションなので庭がない。広い庭のある一軒家に憧れていた。庭で野菜を育てたり、バーベキューをやったり、何でもできそうな気がした。家のマンションのペランダではできない。でも、うちの前にはシバヒロという広いみんなの庭があった。サッカーやかけっこ、ダンスの練習までみんなの庭では何でもできた。この庭で、私は憧れのバーベキューをやった。家に帰る前に私はシバヒロに行くこ



とにした。シバヒロを歩いてさんぽする。手入れされた綺麗な芝生。歩いているだけで気持ちがいい。私は少しの間、靴を脱ぎ裸足でシバヒロをさんぽした。その時、私は一瞬誰かと目が合った気がした。私かな？未来の私かもしれない。私は胸がドキドキした。そして深呼吸をして全集中で私を探した。でもみつからなかった。気のせいかな？とても残念。私は諦めて、脱いでいた靴をまた履いて家に帰ることにした。

玄関を開けるとお母さんが待っていた。

「おかえり、さんぽはどうだった？」

ここにこしながら私の手を握るお母さん。優しい声とこの笑顔を見て私は安心する。

そっかあ。私は思った。タイムマシンを完成させて、未来の私が過去に戻って一番最初に会いたい人。そうだよね。私は嬉しくなった。

ただの散歩じゃないさんぽ。明日はお母さんの後をつけてみよう。

## 空を見あげて

工藤 美結

町田市の空は、いつも色が違う。それは、カワセミたちが市民のリクエストに合わせて空の色を変えてくれているからだ。近くの木の花の穴や枝に、リクエストの色を書いた紙を置く。するとカワセミたちがそれを回収し、リクエストが多かった色に町田市の花のエキスで空を染める。

例えば今日は、「空を黄色にしてほしい」というリクエストが多かった。するとカワセミのリーダーは

「今日は黄色のコスモスエキスを使おう。」

と指示した。カワセミたちはエキスを入れたじょうろを持ってエキスをまきながら雲の上を飛ぶ。町田市の鳥たちは飛ぶ訓練を受けているため、雲の上という高い所まででも飛ぶことができるのだ。エキスはカワセミが発明した不思議な成分のおかげで、空に綺麗にしみこむ。そして午前九時から午後六時の間、町田市の空の色は黄色になる。この九時から六時という時間も、カワセミが考えたもの。朝の日の出、夕方の夕焼け、夜の星空は自然のままに楽しみ、残りの時間は色のついた空を楽し

むことができるのだ。この空の写真はネットで話題になり、最近では町田市は多くの若者たちでにぎわっている。

ある日、カワセミのリーダーは頭をかかえていた。

「ムムム……。どうしたことか……。」

なんと五つのリクエストの票数が全て同じになってしまったのだ。

一つ目は、ピンク色のリクエスト。

二つ目は、紫色のリクエスト。

三つ目は、白色のリクエスト。

四つ目は、赤色のリクエスト。

五つ目は雨水に色がついていて洗濯物が汚れたので色を変えないでくれというリクエストだった。

「ウーン……。……。ソウダ！」

リーダーはあることをひらめき、

「赤とピンクのサルビア、白のコスモス、紫ののぎくのエキスを同じ量ずつ用意して、離れた所にそれぞれまくんだ！」

と指示した。カワセミたちがその通りにすると、色々な所から場所によって色が違

っているとか、雨が降ったら困るんだとかいう意見が来た。リーダーは素早く次の指示を出す。

「みんなで羽を使って風を起こすんだ！何羽かは洗濯物が干してある家を探して、洗濯物の上でこの大きな布を持っておくのだ！」

指示通りカワセミたちは雲の中で羽ばたいて強い風をおこす。すると空の色が混ざりだした。それと同時に、雨が降ってくる。そしたら大きな厚い布を持ったカワセミが布で洗濯物をガードした。カワセミの特技である水面ダイブを披露して、文句を言う人々を落ち着かせるカワセミもいた。雲の中のカワセミたちは一生懸命風をおこす。メジロやシジュウカラも助けに来て、みんなで空の色を混ぜた。空の色たちは混ざってマール柄になり、市民は見たことのない空に笑顔になった。

それ以来、町田市はさらに有名になった。空の色の雨水で布を染め、それを洗うことで綺麗な薄い色の布ができる「空染め」もお土産として人気になった。さらに、強風によって流れた色のついた雲は色々な所に流れ、色のついた空は全国に広まった。その発祥地である町田市の人々は観光の案内やお土産の販売に毎日大忙しだ。

そんな人々を、カワセミたちはいつも見守っている。

さて、今日の空は何色かな。





受  
賞  
作  
品  
一  
覽

市長賞

小学生の部

「カメムシそう理大臣」

伊賀陽一（町田市立つくし野小学校 三年）

中学生・高校生の部

「抜け殻」

前島恵（東京都立成瀬高等学校 二年）

教育長賞

小学生の部

「僕らとリスの五日間小戦争」

高山想真（町田市立藤の台小学校 六年）

中学生・高校生の部

「夏女」

福岡楓夕（町田市立真光寺中学校 三年）

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

小学生の部

「氷細工」

原彩七（町田市立南第三小学校 六年）



中学生・高校生の部

「ある町田の普通」

小田 東依 (町田市立真光寺中学校 一年)

### 審査員賞

小学生の部

「そらのひみつ」

小林 花穂 (町田市立忠生第三小学校 一年)

中学生・高校生の部

「お天気選挙」

中村 汎森 (和光高等学校 二年)

### ことばらんど賞

小学生の部

「ただの散歩じゃないさんぽ」

大塩 陽菜 (桐蔭学園小学校 三年)

中学生・高校生の部

「空を見あげて」

工藤 美結 (町田市立つくし野中学校 一年)



審  
查  
員  
講  
評

「カメムシそう理大臣」（伊賀陽一）

完璧な作品でした。「掲示板にカメムシがとまっていた」という日常のひとつコマからのファンタジーな展開は、大胆なのにとても自然です。小さなバッチをつけてもらったところなど、細部の描写にうっとりしました。カメムシの特性を活かした結末はもちろん、なんとなく風刺っぽく詠めるのも圧巻です。

—— 藤岡 みなみ

「抜け殻」（前島恵）

気力がなくなり「抜け殻状態」になった人は本当に抜け殻を残す、というアイデアが秀逸であることはもちろんのこと、その抜け殻に対する主人公の感情の描き方、ストーリー展開、結末の情景など、どれをとってもお見事です。コンクールを超え、現代ショートショートのうち作品としても傑作の部類だと思います。

—— 田丸 雅智

「僕らとリスの五日間小戦争」（高山想真）

リス園や薬師池公園など実際に町田にあるものからこんなお話が生まれるとは、と豊かな想像力になりました。スピーディーな展開に引き込まれ、臨場感あるバトルシーンにもハラハラさせられます。ハングリースクワールというネーミングもいいですね。行間からエネルギーがほとばしる、じつに意欲的な一策でした。

—— 田丸 雅智

「夏女」（福岡楓夕）

まるでトレンディードラマを一本観たかのような、お洒落でスタイリッシュな世界観に魅了されました。そして何より夏女というアイデアがとても素晴らしかったですね。読んだ後にまるで夏の終わりのような一抹の寂しさを感じる、素敵なファンタジーでした。

—— K E N T H E 3 9 0

「氷細工」（原彩七）

作品の世界に引き込まれるように、あつという間に読んでました。公園で遊ぶ子どもの姿など一つ一つの描写が具体的で、それによって物語がより色鮮やかにイメージできましたし、最後の展開にはなるほど！と驚かされました。

—— K E N T H E 3 9 0

「ある町田の普通」（小田東依）

巨人や怪獣が町田に住んでいるという飛躍した設定でありながら、子ども同士や親子のやり取りが切実でリアリティーを感じました。登場する子どもたちにとっての普通や、親たちにとっての普通、巨人や怪獣が当たり前に住んでいるというこの町の人にとっての普通など、普通とは何かを問う描き方もお見事でした。

—— 田丸 雅智

「そらのひみつ」（小林花穂）

リズム感が抜群で、音読したくなる作品です。自分のテンポを持っている方なのだと思います。空をモチーフにした作品は多いですが、煙突の上にしたから汚れたというのと、しゃぼんだまで空をお洗濯というアイデアが、シンプルな新鮮でハツとしました。

——  
藤岡 みなみ

「お天気選挙」（中村汎森）

お天気の選挙というファンタジーなシステムを使いながら、とても本質的なことが語られていると思いました。いろんな読み方ができる「いつになったら世界は快晴になるのだろうか」という一行が心に刺さります。文体や言葉選びが内容にフィットしているのも素晴らしいです。

——  
藤岡 みなみ

「ただの散歩じゃないさんぽ」（大塩陽菜）

町田の魅力的なスポットと一緒に散歩させてもらっているような素敵な作品でした。そして結局「一番会いたい人」が誰だったかというところに、優しい気持ちにさせてもらいました。最後の「今度は後をつけてみよう」という一文も、可愛らしさと悪戯っぽさと、さまざまなニュアンスが感じとれて良かったです。

—— KENTHE 390

「空を見あげて」（工藤美結）

細部の描写がいきいきとしています。カワセミたちがドタバタ奮闘する姿がとっても楽しい。特に、洗濯物を布でガードするところと、文句を言う人を芸で落ち着かせるところが素敵です。「町田市の鳥、カワセミ」という情報に愛おしい手触りとロマンを与えてくれる作品でした。

—— 藤岡みなみ







プ  
ロ  
フ  
ィ  
ー  
ル

審  
査  
員

審査員長 田丸雅智

ショートショート作家。二〇一一年に作家デビュー。代表作「海酒」は短編映画化されカンヌ映画祭などで上映された。現代ショートショートの旗手として、執筆に加え全国各地で創作講座を開催するなど幅広く活動。

審査員

K E N T H E 3 9 0

rapper。町田市出身。フリースタイルバトルで実績を重ね二〇〇六年にデビュー。二〇一二年から音楽レーベル「DRAM BOY」を主宰。国内外でのライブのほか、TVやラジオへの出演、楽曲提供、音楽監修など幅広く活動。

審査員

藤岡みなみ

エッセイスト・ラジオパーソナリティ・ドキュメンタリー映画プロデューサー。時間SFと縄文時代が好きで、読書や遺跡巡りって現実にあるタイムトラベルでは？と思い二〇一九年からタイムトラベル専門書店を始める。

実

施

概

要

「ことばらんどシヨートシヨートコンクール2022」実施概要

主 催 町田市民文学館ことばらんど・町田市立図書館

協 力 東京町田・中ロータリークラブ

応募資格 町田市在住・在学の小・中・高校生

募集期間 二〇二二年七月一日～九月二〇日

募集作品規格

シヨートシヨート作品

四〇〇字詰め原稿用紙一～五枚

テーマ ①自由 ②町田が舞台

賞 市長賞

教育長賞

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

審査員賞

ことばらんど賞

審査員 田丸雅智

審査員 K E N T H E 3 9 0

審査員 藤岡みなみ

応募件数 八八七編

小学生 四一一編

中学生 三八六編

高校生 九〇編

ことばらんどショートショートコンクール2022受賞作品集

発行日 二〇二三年六月一日

編集・発行 町田市民文学館ことばらんど

〒一九四―〇〇一三

東京都町田市原町田四―一六―一七

電話 〇四二―七三九―三四二〇

刊行物番号

23 | 17

